

## アルコール依存症者の専門医療機関受診までの一考察 -飲酒に関わる経験の語りから-

川嶋咲世 神廣憲記

### 【はじめに】

アルコール依存症(以下、ア症)は、長期間多量に飲酒した結果、アルコールに対して精神依存や身体依存をきたす精神疾患である。習慣的な飲酒によって、アルコールに対する耐性・精神依存が形成され、身体依存にて離脱症状が出現し、離脱症状が強くなるとその症状を軽減するために飲酒が繰り返されると言われている。推定の患者数は約100万人だが、実際に専門治療を受けている患者数は約5万人に留まり、精神疾患の中でも未治療者の割合が多いと言われている。専門医療機関受診までのプロセスを調査した岩田(2008)は、「反復飲酒によりうまく回っていた社会生活」「問題飲酒の表面化と要因の誤認」「周囲の人々からの孤立化」「周囲の人々によるア症治療へのアクセス支援」の4段階を明らかにしている。本研究においては、初飲から専門治療病院初診までの当事者の経験の語りから「どのようにア症に陥っていくのか？」について調査した。

### 【方法】

本研究の条件を満たし趣旨に承諾を得られたアルコール依存症A氏を対象に、「初飲から飲酒に関わる経験」について半構造化インタビューを行った。内容はICレコーダーに録音し逐語録を作成した。分析方法はSteps for Coding and Theorization(SCAT)を用いて、分析は第一筆者が行い、第二筆者と分析結果・考察を協議し信頼性と妥当性を確保した。

### 【結果】

分析の結果、A氏は《飲酒の社会的価値づけの学習》《酒を介した人間関係の拡張と酒による回復可能な体調不良》《自己統制できない飲酒行動と酒による社会的失敗・制裁》《飲酒問題についての受療決断》を経て、専門医療機関受診につながり《酒に縛られた日々からの解放》を語った。

### 【考察】

これらの結果は、岩田(2008)に経験プロセスと類似していたが、初飲からの経過を調査することで、習慣的飲酒前の《飲酒の社会的価値づけの学習》が明らかとなった。また、A氏の経験プロセスから、初期の段階でアルコールによる社会的影響の大きさも認識されていたが《回復可能な体調不良》によって、その後も飲酒行動は継続され精神依存・身体依存に陥ることが示された。また「初めて飲んだ時のアルコールの味」「飲酒行動に関わる社会の許容」の経験が、のちの習慣的な飲酒行動にも結びつくこと示唆された。

アルコールは私たちの生活において馴染み深いものである一方で、長期間での多量飲酒生活は個人の心身を蝕む。適量以上、習慣的な飲酒を継続することが依存症ではないが、ある一定の段階を超えると個人を脅かす害となる。A氏は“やめたくてもやめられない”状況まで数十年の経過とその後自力での断酒を試みている。アルコールが何らかの問題を生じさせていると認識しながらも、目で見える形で心身に表れない限りは病気としての認識と受療決断が難しい病であることが考えられる。その背景にはア症の“否認の病”、ア症の病気に対する認識誤認、スティグマなども関連していると推察されるが本研究においては十分な検討は難しく今後の課題としたい。